

教育研究業績書

2021 年 5 月 1 日

氏名 朝比奈 朋子

学位：社会福祉学修士

研究分野	研究分野のキーワード	
社会福祉学	貧困問題、高次脳機能障害者の地域生活支援	
主要担当授業科目	社会福祉、保育実習指導 I (保育所・施設)、保育実習 I (施設)	
教育上の実績に関する事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例 ①福祉士実習の手引きの作成 (学内用実習指導教材としての活用)	平成 19 年 4 月～ 平成 25 年 3 月	川村学園女子大学における社会福祉士・精神保健福祉士の各実習指導に平成 18 年 4 月より携わり、平成 19 年 4 月から責任者として担当するにあたって、新たに実習指導教材として作成した。実習に向けての心構え、資格取得に向けての動機づけから、実習前の準備を段階的に進めることができるように構成した。 実習担当実績は以下の通りである。 ・社会福祉現場実習指導 (通年科目) (平成 18 年 4 月～平成 23 年 3 月) ・社会福祉現場実習 (集中科目) (平成 18 年 4 月～平成 23 年 3 月) ・ソーシャルワーク実習指導 (1) (半期科目) (平成 22 年 4 月～平成 24 年 3 月) ・ソーシャルワーク実習指導 (2) (通年科目) (平成 23 年 4 月～平成 25 年 3 月) ・ソーシャルワーク実習 (集中科目) (平成 23 年 4 月～平成 25 年 3 月) *以降は、在籍学生不在の為、担当なし
②反復学習の徹底と個人指導、模擬試験を組み合わせた授業の展開 (国家試験対策として)	平成 19 年 4 月～ 平成 26 年 1 月	川村学園女子大学における社会福祉士・精神保健福祉士の国家試験対策として、受験資格取得モデルの中に受験対策を盛り込み、3 年次以降の学習プログラムを構築した。具体的には 3 年次には受験対策授業 (週 1 回、通年科目) と模擬試験 (年 2 回) を用意し、受験に対する情報を教授し、受験勉強に対するモチベーションの向上を目指した。4 年次には受験対策授業を週 2 回 (通年)、模擬試験を年 4 回用意し、勉強方法の改善や対策について適宜個人面談を行った。 合格率の向上等具体的な成果を示すに至らなかったが、受験に対する学生のモチベーションは確実に向上させた。また、福祉現場への就職が増加した。

<p>③障害者施設でのボランティアプログラム・生涯学習実習の実践</p>	<p>平成 21 年 4 月～ 平成 27 年 3 月</p>	<p>「社会教育専門演習」(3 年次ゼミ)の一環として、NPO 法人足立さくら会の運営する地域活動支援センターへのボランティア活動を行うための学習プログラムを構築し、自主活動としてボランティア実践をスムーズかつ有効に行うことができるようにした。 そのプログラムをアレンジして、生涯学習実習として行っており、福祉専門教育を受けていない学生を対象とした。</p>
<p>2 作成した教科書・教材 ①高次脳機能障害のリハビリテーション【病態編】 (医療従事者向け学術ビデオ) <企画>東京都医師会、東京都リハビリテーション病院 <制作>株式会社 B B プロモーション</p>	<p>平成 14 年</p>	<p>高次脳機能障害について、医療従事者が偏見のない科学的な視点で病状を捉え、患者の機能回復に努めることができるよう、高次脳機能障害を 10 種類の障害に分けて病態を説明したもの。作成委員のメンバーとして制作に関わった。</p>
<p>②『低所得者支援と生活保護制度』 渋谷哲編著、みらい</p>	<p>平成 21 年 11 月 (第一版) 平成 24 年 3 月 (第二版) 平成 27 年 3 月 (第三版) 平成 27 年 9 月 (第四版)</p>	<p>社会福祉士新カリキュラムに対応したテキスト。第 8 章、第 13 章第 3 節(第三版以降は、第 8 章、第 13 章第 2 節)を執筆担当。内容は「著書・学術論文等」に記載。</p>
<p>③『貧困に対する支援』渋谷哲編、みらい</p>	<p>令和 3 年 4 月</p>	<p>令和 3 年から実施された、新社会福祉士養成課程対応のテキスト。第 8 章、第 13 章第 2 節を執筆担当。内容は「著書・学術論文等」に記載。</p>
<p>③『就労支援サービス』小川浩編、みらい</p>	<p>平成 27 年 4 月 16 日</p>	<p>社会福祉士新カリキュラムに対応したテキスト。第 7 章第 2 節第 1 項を執筆担当。内容は「著書・学術論文等」に記載。</p>
<p>④社会福祉士・精神保健福祉士国家試験受験対策 web 講座講師「社会保障」(一般社団法人日本ソーシャルワーク教育 学校連盟主催)</p>	<p>令和元年 8 月収録</p>	<p>一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟主催の国家試験受験対策 web 講座講師として「社会保障」科目を担当。オープンソースとして講義内容をインターネットにて広く公開するとともに、web 講座として講義外に学生が学びを深めることができる教材作成に取り組んだ。</p>

<p>3 当該教員の教育上の実績に関する大学等の評価</p> <p>①FDによる授業公開における評価 (社会教育学科教授による)</p> <p>②FDによる授業公開における評価 (幼児教育学科教授、生活文化学科准教授による)</p> <p>4 その他</p> <p>①反復学習の徹底と個人指導、模擬試験を組み合わせた授業の展開(国家試験対策として) (1②再掲)</p> <p>②就職対策としての少人数時間外指導(主に公務員試験対策として)</p>	<p>平成24年10月</p> <p>平成26年7月</p> <p>平成19年4月～平成26年1月</p> <p>平成24年4月～平成27年3月</p>	<p>川村学園女子大学教育学部社会教育学科で担当していた「福祉教育論」の授業参観後に受けた評価・感想の大意は以下の通りであった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「社会福祉の歴史」をテーマに映像を効果的に用いていた。 ・障害児の福祉と教育について考えさせられる授業内容であった。 ・授業中に学生への問いかけをする等、学生を授業に参加させているのがよかった。 <p>川村学園女子大学教育学部幼児教育学科で担当していた「社会福祉」の授業参観に受けた評価・感想の大意は以下の通りであった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最初に前回の授業の振り返りをするなどし、学生の気持ちを集中させていた。わかりやすい授業。 ・私語をする学生がいなかった。 ・受講生が多く、反応は悪かったが、前回の授業のリアクションペーパーに対するコメントをすることで学生の意欲が高まっていた。 <p>概要は上述した通り。4年次の週1回分の授業及び個人面談は規定のカリキュラム外の時間に設定し、学生の便宜を図った。また、個人面談を設けることで、個々の学生の勉強方法や理解度に合わせた指導ができ、学生の学習意欲向上にも役立った。</p> <p>上述した福祉士国家試験対策を参考にして、主に公務員試験対策を念頭に置いた2～3年生を対象にした授業時間外のグループ学習及び就職試験対策の指導を行っている。少人数であるため、個々の学生に対応することができ、また学生同士で情報の共有ができるため、就職意欲や学習意欲の向上に役立っている。</p>
<p>職務上の実績に関する事項</p>	<p>年 月 日</p>	<p>概 要</p>
<p>1 東京都医師会研修会講師 「高次脳機能障害のリハビリテーション『復職について』」</p> <p>2 東京都医師会研修会講師 「慢性疼痛のリハビリテーション『ソーシャルワーカーの評価』『ソーシャルワーカーのアプローチ』」</p> <p>3 民生・児童委員研修会 講師</p>	<p>平成14年11月</p> <p>平成15年11月</p> <p>平成22年4月</p>	<p>東京都リハビリテーション病院での高次脳機能障害者への復職支援について、医療ソーシャルワーカーの立場からその支援方法について講義した。</p> <p>東京都リハビリテーション病院での慢性疼痛患者への医療チームの取り組みから、リハビリテーション医療におけるソーシャルワーカーの行う評価と援助方法について講義した。</p> <p>埼玉県社会福祉協議会主催の民生・児童委員に向けた研修会講師。現代の貧困問題と民生・児童委員の役割について講義した。</p>

4 医療ソーシャルワーカー初任者研修会 講師	平成24年6月	千葉県医療社会事業協会主催の医療ソーシャルワーカー（1～5年未満）に向けた研修会の講師。『ソーシャルワーカーに求められる役割、医療ソーシャルワーカーに必要な社会保障制度』と題して主に生活問題と社会保障制度の関連について講義した。
5 2級ヘルパー講習 講師	平成24年10月	東京都足立区社会福祉協議会主催の2級ヘルパー講習の『高齢者と障害者の心理』を担当。高齢者と障害者の社会的な位置づけからその心理を解説し、対応上の注意点等を講義した。
6 高次脳機能障害サポーター育成研修 講師	平成25年2月	NPO 法人足立さくら会主催の高次脳機能障害サポーター育成研修（講習会2日間）での講師。『高次脳機能障害の理解と対応方法』と題して、高次脳機能障害者の社会保障・社会福祉制度上の位置づけから、個々の症状と対応方法について講義した。
7 東京都医療社会事業協会グループスーパービジョン講師（東京都委託事業）	平成26年6月～平成31年3月	経験年数2年以上の東京都医療社会事業協会の会員を対象としたグループスーパービジョン（年10回）の講師を担当。生活問題についての理解と生活アセスメントについての講義（1回）を基に9人定員のグループでのスーパービジョンの講師を務めている。
8 2016年度東京成徳大学八千代キャンパス一般公開講座講師	平成28年11月	「高次脳機能障がいを知っていますか？」のタイトルで講師を担当した。
9 TSU オープンカレッジ2017春期講座「ソーシャルワークのアセスメント - 共感的理解を基にした支援をするために -」講師	平成29年6月	地域の現任ソーシャルワーカー等を対象とした生活アセスメントを用いたアセスメントについての講座を開講した。生活アセスメントの概要の解説とともに、ワークショップを行った。
10 千葉県中堅民生委員児童委員講座講師	平成29年11月	千葉県民生委員児童委員協議会主催の2年以上の民生委員・児童委員向けの講座の講師。民生委員・児童委員の訪問活動のポイントと生活保護世帯の事例を用いたグループワークを行った。
11 北関東甲信越・関東地協SW初任者研修会	平成30年3月	MSWの専門性とアセスメントの重要性について、生活アセスメントの実践を用いて講義を行ったのちにワークショップを行った。
12 TSU オープンカレッジ2018秋期講座「ソーシャルワークのアセスメント - 共感的理解を基にした支援をするために -」講師	平成30年11月	地域の現任ソーシャルワーカー等を対象とした生活アセスメントを用いたアセスメントについての講座とグループワークによる演習を開講した。

著書・学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1 労働体系から見る女性「ホームレス」の源泉について	単著	平成 17 年 9 月	川上昌子編著『日本のホームレスの実態』学文社	女性「ホームレス」を生み出している経済的・社会的状況を労働体系に着目して分析を行い、現代日本の女性の不安定低所得職種の析出に至った。「学術論文 1. 2.」の一部を加筆修正したものである。担当箇所は第 8 章 (P279～P314) である。
2 川崎市のホームレス—どんな人たちか	共著	平成 17 年 9 月	川上昌子編著『日本のホームレスの実態』学文社	ホームレスが野宿生活をしながらも何らかの仕事をしていることに着目し、過去の職歴の移り変わりとして現在の仕事の内容について分析した。「学術論文 4」を加筆修正したものである。担当箇所は第 3 章第 2 節 (P103～P122) である。 〔共同執筆者〕 牧原信也 (作表等分担)
3 記憶障害例：知的障害者作業所への定着に難渋した若年脳外傷例	共著	平成 18 年 6 月	本田哲三、坂爪一幸他編集『高次脳機能障害のリハビリテーション—社会復帰支援ケーススタディー—真興交易 (株) 医書出版部	受傷後 10 年以上経過した後高次脳機能障害の診断を受けた若年者の社会復帰支援の症例をまとめたものである。本症例はチームアプローチで行ったものであり、執筆分担は共同執筆者と共同で行ったため指摘できない。担当箇所は V 章「介入事例」3 節「未就労者編」B である。P169～179 〔共同執筆者〕 大久保幸枝
4. 「高次脳機能障害者を支える諸制度」 「関係諸機関」	単著	平成 22 年 5 月	本田哲三編集『高次脳機能障害のリハビリテーション—実践的アプローチ—第 2 版、医書書院	高次脳機能障害者と家族が地域で生活するために活用可能な社会資源 (主に社会保障制度) の紹介をし (「高次脳機能障害者を支える諸制度」)、実際の関係機関を紹介した (「関係諸機関」)。担当箇所は 8 章 (P241～246)、9 章 (P274～251) である。

<p>(学術論文)</p> <p>1 現代日本の女性「ホームレス」の源泉－東京を中心として</p>	<p>単著</p>	<p>平成 12 年 3 月</p>	<p>修士論文 (淑徳大学大学院)</p>	<p>女性「ホームレス」を生み出している経済的・社会的な生活基盤の不安定さを構造的に分析し、女性「ホームレス」の源泉を明らかにするとともに、女性「ホームレス」の抱えている生活問題や置かれている状況について事例を通して述べた。</p>
<p>2 現代日本の女性「ホームレス」の源泉と生活状況－東京を中心として－</p>	<p>単著</p>	<p>平成 13 年 3 月</p>	<p>淑徳大学社会福祉研究所 総合社会福祉研究室 総合社会福祉研究室年報 5号</p>	<p>上記、修士論文を一部加筆訂正したものである。該当頁：P124～P174</p>
<p>3 医療スタッフによる一記憶障害者へのジョブコーチの試み</p>	<p>共著</p>	<p>平成 15 年 2 月</p>	<p>リハビリテーション医学VOL40 No. 2</p>	<p>医療機関内で行った記憶障害者への復職援助についてまとめたもの。障害評価から復職援助まで全て共同研究としておこなったものであり、執筆分担箇所は指摘できない。介入期間の全ての記録とそのまとめを担当した。該当頁：P127～P133 〔共同研究者〕高橋玖美子、本田哲三、朝比奈朋子、上久保毅</p>
<p>4 ホームレスと就労</p>	<p>単著</p>	<p>平成 15 年 3 月</p>	<p>淑徳大学社会福祉研究所 総合社会福祉研究室 総合社会福祉研究室年報 7号</p>	<p>平成 15 年の川崎での野宿生活者実態調査より、ホームレスが野宿生活をしながらも約9割の人が何らかの仕事をしていることに着目し、どのような生活実態であるのか分析を行った。また、ホームレスに至る過程を職業と住居の移り変わりに着目し、どのような傾向があるのか分析した。該当頁：P60～P83</p>
<p>5 バタード・ウーマンとしての女性ホームレス</p>	<p>単著</p>	<p>平成 17 年 3 月</p>	<p>淑徳大学大学院淑徳大学大学院研究紀要第17号</p>	<p>淑徳大学大学院オープンリサーチセンター主催の公開シンポジウムでの発言内容をまとめたもの。女性ホームレスと社会的暴力の関連を述べた。該当頁：P325～P329</p>

<p>6 ホームレス宿泊施設入所者の実態—市川調査から見えること—</p>	<p>共著</p>	<p>平成17年10月</p>	<p>野宿者・人権資料センター発行 「Shelter-less」</p>	<p>平成16年に市川市で行ったホームレス宿泊施設での調査について、入所者の特性類型と入所に至る理由の2層の各指標を導き出し、施設の意味と役割、必要な支援について考察を行った。 調査の分析から執筆まで共同執筆者と共同研究として行ったため、執筆担当箇所は指摘できない。 〔共同執筆者〕 大久保幸枝 掲載箇所：P195～P212</p>
<p>7 高齢者骨関節外傷リハビリテーションへの社会的視点からのアプローチと支援</p>	<p>単著</p>	<p>平成17年10月</p>	<p>高齢者骨関節外傷リハビリテーション実践マニュアルNo.59 全日本病院出版会 MB Medical Rehabilitation</p>	<p>リハビリテーションチームの一員としてのMSWが行う心理・社会的評価から、高齢者の生活問題と必要な視点、医療の中で行うMSW援助の役割を考察した。 また、具体的な事例を通して、MSWの評価を基にしたソーシャルワーク援助の役割を考察した。掲載箇所：P60～P67</p>
<p>8 生活保護世帯における女性就労の特徴について</p>	<p>単著</p>	<p>平成19年3月</p>	<p>川村学園女子大学研究紀要 第18巻 第2号</p>	<p>千葉県B市で行った生活保護世帯の調査から女性ケースを取り出し、これらの生活保護を受給している女性の就労についてその特徴を分析した。B市においては、健康な者は全員何らかの就労をしているものの、生活保護基準以上の収入を得ることが難しい実態を指摘した。該当頁：P75～P94</p>
<p>9 生活保護受給者の就労支援プログラムに関する研究—千葉県A市生活保護世帯自立支援事業に係る実態調査から</p>	<p>共著</p>	<p>平成19年3月</p>	<p>淑徳大学社会福祉学会『淑徳社会福祉研究 第13・第14号 合併号』</p>	<p>千葉県A市で行った生活保護世帯を自立支援の観点から調査・分析したものをまとめたものである。調査・分析は、淑徳大学社会福祉学部社会福祉学科川上研究室（代表：川上昌子）がA市から委託されて行ったものであり、研究会メンバーによる共同研究である。該当頁：P93～175 主な執筆担当箇所はP116～P172である。自立支援の観点からのアセスメントの方法およびそのアセスメントによる類型化の方法を述べた。また、そのアセスメントを用いた就労支援の実際を実行し、それをまとめた。 〔共同研究者〕 川上昌子代表、渋谷哲、樋田幸恵、金寿蓮、杉野緑、柏貴美他</p>

<p>10 現代の「貧困」とは何 かー特集「現代の貧困問題 を考える」序論にかえてー</p>	<p>単著</p>	<p>平成 21 年 5 月</p>	<p>東京都医療社会事業 協会『医療ソーシャルワ ーク 57 号』</p>	<p>現代の貧困問題について、医療ソ ーシャルワークの現場で貧困をどの ように捉えるべきなのかを過去のホ ームレス調査や自立支援の調査から得 られたデータを元に述べた。また、現 在の生活保護制度において行われて いる自立支援の問題点についても指 摘した。該当頁：P3～P13</p>
<p>11 地域生活における高 次脳機能障害者の社会福 祉としての「障害」の把 握ー日常生活における困 難さを中心に</p>	<p>単著</p>	<p>平成 26 年 3 月</p>	<p>川村学園女子大学研 究紀要 第25巻 第2 号</p>	<p>地域生活を送っている高次脳機能 障害者が、日常生活においてどのよ うな困難を抱えているのかについて、16 事例の調査・分析を行った。個々の動 作ではなく一連の行為をとらえるこ とで生活のしづらさが見えている可 能性を指摘した。該当頁：P191～P 207</p>
<p>12 生活困窮者自立支援 制度における対象者把握 に関するー考察 ー平成27年度事業報告書 及びアセスメントシート 項目からー</p>	<p>単著</p>	<p>平成 29 年 3 月</p>	<p>東京成徳大学研究紀 要 - 人文学部・応用心 理学部 - 第 24 号</p>	<p>平成27年から施行された生活困窮 者自立支援法が対象とする者をどの ように把握しているのかを平成27年 度の事業報告書から分析し、その結果 から生活困窮者の把握方法に関して 考察した。家族の中で生活している生 活困窮者の生活問題を把握する必要 性と生活問題の質の違いを正しく捉 える必要性を指摘した。 該当頁：P1～12</p>
<p>13 生活困窮者自立支援 制度利用者に見る世帯の 特徴ーA市の生活困窮 者自立相談支援事業利用 者の調査分析からー</p>	<p>共著</p>	<p>平成 30 年 3 月</p>	<p>東京成徳大学研究紀 要 - 人文学部・応用心 理学部 - 第 25 号</p>	<p>A市における生活困窮者自立支援法 における自立相談支援事業利用者の調 査のうち、世帯に関する特徴について 分析、考察を行った。その結果、生活 困窮に陥っている世帯の特徴の一つと して、稼働年齢にある「子」と高齢者 の「親」の組み合わせで寄せ集まって 生活している世帯について指摘した。 該当頁：P61～P72 共著者は調査分析作業を共同した者 であり、執筆は全て担当した。 〔著作者〕朝比奈朋子、杉野緑</p>

<p>14 生活困窮者自立相談事業利用者にみる単身世帯の生活の不安定性の特徴—A市生活困窮者自立相談支援事業利用者の健康状態と就労状況を中心に—</p>	<p>共著</p>	<p>平成 31 年 3 月</p>	<p>東京成徳大学研究紀要 第 26 号</p>	<p>A市における生活困窮者自立支援法における自立相談支援事業利用者の調査のうち、単身世帯に関する特徴について分析、考察を行った。その結果、稼働年齢層にある年齢層が中心であることを明らかにし、住宅費を含む必要最低限の生活費が不足していることを指摘した。該当頁：P101～P118 共著者は調査分析作業を共同した者であり、執筆は全て担当した。 〔著作者〕朝比奈朋子、杉野緑</p>
<p>15 生活に困窮する求職者の特徴—就労支援プラン作成者の事例から—</p>	<p>共著</p>	<p>令和 2 年 3 月</p>	<p>東京成徳大学研究紀要 第 27 号</p>	<p>生活困窮者自立支援制度利用者のうち「就労支援プラン」作成者に焦点を当て、その就労と生活の特徴を分析、考察を行った。その結果、健康状態に不安を抱えている中高年者が中心であり、多くの生活問題を抱え、当面の生活維持のため参入しやすい非正規雇用へと繋がっていることを明らかにした。該当頁：P45～P58。共著者は調査分析作業を共同した者であり、執筆は全て担当した。 〔著作者〕朝比奈朋子、杉野緑</p>
<p>(その他) (報告書) 1 川崎市の野宿生活者—川崎市野宿生活者実態調査報告書— 2 高次脳機能障害者の社会復帰—訪問指導による生活現場での援助—</p>	<p>共著 共著</p>	<p>平成 15 年 3 月 平成 15 年 11 月</p>	<p>川崎市健康福祉局 東京都リハビリテーション病院</p>	<p>調査代表者川上昌子淑徳大学教授。執筆担当：P47～P65。「全数調査」で約 9 割の人が野宿生活をしながらも何らかの仕事をしていることが明らかになった。この結果より、実際にどのような人たちが野宿生活をせざるを得ないのか、その生活を仕事の状況、野宿への過程などより分析した。 〔他執筆者〕大久保幸恵、柏貴美、杉野緑他 代表者東京都リハビリテーション病院副院長本田哲三。執筆担当：P35～P38、P102～P109。高次脳機能障害者の職場復帰支援のための心理・社会的評価の具体的な評価項目とその意味を述べた。また、それらの一つ一つの項目から導き出す総合的な評価に必要な視点を述べた。 〔他執筆者〕坂爪一幸、高橋玖美子、倉持昇他</p>

3 高次脳機能障害者の社会復帰（その2）—訪問指導による生活現場での援助：職場適応困難者・失職者編—	共著	平成16年11月	東京都リハビリテーション病院	代表者東京都リハビリテーション病院副院長本田哲三。執筆担当：P32～P39。具体的な職場介入援助を行った事例であるスーパーマーケットのアルバイト店員への援助過程と援助の特徴を考察した。 〔他執筆者〕坂爪一幸、高橋玖美子、倉持昇他
4 習志野市における住宅手当受給者の調査結果報告 - 住宅手当受給者の就労・生活の実態と自立について -	共著	平成 25 年 3 月	川上昌子、習志野市保健福祉部保護課	代表者川上昌子淑徳大学名誉教授。執筆担当：P16～P18。2007年に行った生活保護受給者のうち、就労自立支援事業の対象となった者との社会階層の比較を行い、住宅手当受給者は安定した階層もしくは不安定ながらもさしあたり生活維持に支障のない階層の者が多いことを指摘した。 〔他執筆者〕秋山秀子、杉野緑、樋田幸恵
5 医療社会事業従事者講習会報告書 No.32 医療ソーシャルワークの解決技法 平成27年度版	共著	平成 28 年 3 月	東京都福祉保健局	執筆担当：P83～P86。グループスーパービジョンCについての総括と、「生活アセスメント」の概要について述べた。
6 医療社会事業従事者講習会報告書 No.33 医療ソーシャルワークの解決技法 平成28年度版	共著	平成 29 年 3 月	東京都福祉保健局	執筆担当：P105～P109。グループスーパービジョンCについての総括とアセスメントの位置づけと意味について述べた。
7 医療社会事業従事者講習会報告書 No.34 医療ソーシャルワークの解決技法 平成29年度版	共著	平成 30 年 3 月	東京都福祉保健局	執筆担当：P111～P114。グループスーパービジョンCについての総括と、家族単位で生活をしていることに立って、「家族」と本人の生活を捉えることの意味について述べた。
8 習志野市における生活困窮者自立支援制度利用者調査結果報告	共著	平成 30 年 3 月	朝比奈朋子、習志野市健康福祉部生活相談課	研究代表朝比奈朋子。P20～P34、P43～P48 以外の執筆を担当した。2015年から施行された生活困窮者自立支援制度における相談者の特徴を捉えることを目的に、2015年4月～2016年1月末までに初回相談に訪れた全相談者の生活状況を調査分析した。〔他執筆者〕杉野緑

9 医療社会事業従事者講習会報告書 No.34 医療ソーシャルワークの解決技法 平成29年度版	共著	平成30年3月	東京都福祉保健局	執筆担当P107～P110。グループスーパービジョンCについての総括と、職歴を把握することの意味について述べた。
10 医療社会事業従事者講習会報告書 No.34 医療ソーシャルワークの解決技法 令和元年度版	共著	令和2年3月	東京都福祉保健局	執筆担当P73～P77。グループスーパービジョンCについての総括と、生活アセスメント実践の意味について述べた。
11 「福祉事務所における生活保護業務の実施体制に関する調査研究事業」実施報告書	共著	令和2年3月	一般社団法人 日本ソーシャルワーク教育学校連盟	厚生労働省 令和元年度生活困窮者就労準備支援事業費等補助金社会福祉推進事業による調査研究報告書。 検討委員会委員として参加し、生活保護行政の実施体制等に関するヒアリング調査の実施及びその内容を事例としてまとめた。 執筆担当(共同執筆)P153～238、P245～246。共同執筆者：増田和高〔他執筆者〕 渋谷哲、船水浩行、畑亮輔、日本ソーシャルワーク学校連盟事務局、他
12 習志野市における就労支援プラン作成者の生活と就労に関する調査結果報告	共著	令和3年3月	朝比奈朋子、習志野市健康福祉部生活相談課	研究代表朝比奈朋子。習志野市との共同研究。表1、2以外を執筆。2016年4月1日から2018年3月31日までに習志野市の生活困窮者自立相談事業を利用した者のうち、就労支援プラン作成者40ケースについての生活と就労の特徴を分析した。〔他執筆者〕杉野緑
(その他)(教科書等) 1 自立支援プログラムによる相談援助	単著	平成21年11月(第一版) 平成24年3月(第二版) 平成27年3月(第三版) 平成27年9月(第四版)	渋谷哲編著『低所得者支援と生活保護制度』みらい	生活保護制度の在り方に関する検討委員会報告により、導入された自立支援プログラムの経緯・意義から、実際の援助過程を簡潔に述べた。担当箇所は、第8章(P147～P157)である。第2版では第8章(P147～P158)を担当。 〔他執筆者〕 渋谷哲、木本明、樋田幸恵、大野地平、柴田純一他

2 就労支援プログラムによる労働施策との連携	単著	平成21年11月(第一版) 平成24年3月(第二版) 平成27年3月(第三版) 平成27年9月(第四版)	渋谷哲編著『低所得者支援と生活保護制度』みらい	自立支援プログラムの中でも、最も早く取り組みが開始されている就労支援プログラムについて、ハローワークとの連携システムの構築によってスムーズに支援が行われている実際を述べた。担当箇所は、第13章第3節「生活保護制度を活用した相談援助活動(演習)」(P225～P230)である。第3版以降は第13章第2節に掲載。 〔他執筆者〕同上
3 社会保障論(模擬試験問題)	単著	平成23年8月	一般社団法人日本精神保健福祉士養成校協会編集『精神保健福祉士国家試験模擬問題集2012』	精神保健福祉士国家試験模擬問題社会保障論7問を作成。担当箇所は2回目(P135～P137)。編集委員は四方田清順天堂大学先任准教授。
4 社会保障論(模擬試験問題)	単著	平成24年7月	一般社団法人日本精神保健福祉士養成校協会編集『精神保健福祉士国家試験模擬問題集2013』	精神保健福祉士国家試験模擬問題社会保障論を作成。担当箇所は2回目・7問(P124～P126)及び3回目・4問(P194～P196)。編集委員は吉澤豊日本福祉教育専門学校精神保健福祉士養成科学科長。
5 保育士採用試験重要ポイント+問題集16年度版	共著	平成26年12月	成美堂出版	コンデックス情報研究所編著の保育士採用試験用対策本。児童家庭福祉と社会的養護の模擬問題及び重要ポイントの解説を作成。担当箇所はP.84～P127。近喰晴子監修、執筆者多数、朝比奈朋子
6 自立支援プログラムによるソーシャルワーク	単著	令和3年4月	渋谷哲編『貧困に対する支援』みらい	上掲(その他)(教科書等)1.の加筆訂正版。担当箇所はP.143～155。
7 就労支援プログラムを活用した支援	単著	令和3年4月	渋谷哲編『貧困に対する支援』みらい	上掲(その他)(教科書等)2.の加筆訂正版。担当箇所はP224～230。
(その他)(学会発表) 1 川崎市の野宿生活者の実態—その2 野宿生活者たちの野宿の過程—	単	平成15年6月	第13回淑徳大学社会福祉学会	川崎市で行った野宿生活者実態調査の結果から明らかになった、野宿に至る過程についてまとめて発表した。
2 現代の女性の不安定低所得職種の検証	単	平成16年6月	第14回淑徳大学社会福祉学会	修士論文他で発表した内容のうち、女性の労働体系の分析から明らかになった、女性の不安定低所得職種の特徴について発表した。

3 リハビリ医療チームによる高次脳機能障害者の就労支援第2報：アプローチの実際	単	平成16年10月	第12回職業リハビリテーション研究発表会	東京都の委託事業である高次脳機能障害社会復帰支援マニュアル検討委員会で取り組んだ復職支援について、その評価から支援の実際までの事例を発表した。
4 回復期リハビリテーション病棟における家庭復帰困難者の要因の検討	共	平成17年6月	第25回日本医療社会事業学会	東京都リハビリテーション病院の回復期リハビリテーション病棟の入院患者のデータ分析から、家庭復帰ができなかった患者の社会的な要因について明らかにし、発表した。〔共同報告者〕石塚里佳、朝比奈朋子、渡辺和未、大久保幸枝、原田直子、武山ゆかり
5 ホームレス宿泊施設入所者の実態—その3入所理由の諸側面から捉えたホームレス像—	単	平成17年6月	第15回淑徳大学社会福祉学会	市川市で行ったホームレス宿泊施設での調査結果から、理由の諸側面から捉えたホームレス像—入所理由を類型化し、そのニーズに応じた支援方法について提示した内容を発表した。
6 生活保護世帯における女性の特徴	単	平成18年10月	第54回日本社会福祉学会全国大会口頭発表	千葉県B市で行った生活保護世帯の調査から、女性ケースの就労状況についての分析を行い、その結果を発表した。
7 ホームレス患者の転帰先に関する報告	共	平成24年6月	第32回日本医療社会事業学会	東京都済生会向島病院のソーシャルワーカーとの共同研究。半年間に入院したホームレス患者の転帰先を分析することで、ホームレスに対する医療及び生活支援についての考察を行い、発表した。 〔共同発表者〕 柏倉剛彦
8 住宅手当受給者の就労と生活の実態（2）—住宅手当受給者の社会的性格—	共	平成25年9月	日本社会福祉学会第61回秋季大会	平成22年～平成23年にかけて行った住宅手当受給者の調査（共同研究）の結果から、低所得階層に位置付けられている受給者の社会的性格について分析し、発表した。住宅手当受給者が現代の不安定低所得層の一形態であることを指摘した。 〔共同発表者〕 朝比奈朋子、川上昌子、杉野緑

<p>9 生活困窮者自立支援制度利用者に見る世帯の特徴 －A市の生活困窮者自立相談支援事業利用者の調査分析から－</p>	共	平成29年10月	日本社会福祉学会第65回秋季大会(ポスター発表)	<p>平成27年から始まった生活困窮者自立相談支援事業の利用者の調査結果(共同研究)から、生産年齢にある子どもが独立することなく定住家族に留まっていることを明らかにし、世帯が低位な収入の寄せ集めによって生活を維持していること、世帯員の中に健康上の問題から一人前の就労ができない者がいるか、健康上の問題を抱えて働くことのできない世帯員の生活を支えていることを指摘した。 〔共同発表者〕朝比奈朋子、樋田幸恵、杉野緑</p>
<p>10 生活困窮者自立相談支援事業利用者における単身世帯の特徴－A市の生活困窮者自立相談支援事業利用者の調査分析から－</p>	共	平成30年9月	日本社会福祉学会第65回秋季大会(ポスター発表)	<p>A市における生活困窮者自立支援法における自立相談支援事業利用者の調査のうち、単身世帯に関する特徴について分析、考察を行った。その結果、稼働年齢層にある年齢層が中心であることを明らかにし、住宅費を含む必要最低限の生活費が不足していることを指摘した。発表の内容を基に論文14.にまとめた。 〔共同発表者〕朝比奈朋子、杉野緑</p>
<p>11 現代の不安定低所得層の生活の特徴－生活困窮者自立支援制度における就労支援事業利用者の事例から－</p>	共	令和元年9月	日本社会福祉学会第66回秋季大会(ポスター発表)	<p>生活困窮者自立支援自制度利用者のうち、就労支援プラン作成者に着目して、利用者の生活実態と就労支援の内容を捉え、現代の不安定低所得層の生活の特徴について分析、考察を行った。その結果、就労支援プラン作成者は、長期にわたる低位な生活の中で多問題を抱えていること、その生活が常態化していることを指摘した。 〔共同発表者〕朝比奈朋子、杉野緑</p>